

あゝ結城先生

―校長先生とよばれなかった校長先生―

みなさんは
どんな小学校生活を
夢にえがいて
入学してきましたか？
盤溪のすばらしい
環境の中で
仲間と共に日々
自分をみがく努力を
されていると思います
盤溪小学校の子どもたちは
とにかくがんばりやさん
ですよ



進藤ハルさんのお話を元に
再話 三枝希恵さん
坪谷京子さん著書
可きぼうむかしたあだん

これらを元にして
ここに話をまとめました

(在校生保護者・出村香奈子)
二〇一八年(平成三〇年)二月

そんなみなさんが通っている、通う事ができているこの盤溪小がどのようにして
開校されたのか知っておいてほしい。知ってこの学校に通えているよろこびを感じ、
盤溪小の児童として誇りをもってまたがんばってもらいたい。そしてこれから
入学してくる子どもたちへこのお話を伝え続けていってもらいたくて、ここに
お話をまとめてみたいと思います。

このあたりは昔、盤の沢という12戸の家しかない小さな村だったそうすよ。
ここに初めてできた学校は「琴似尋常高等小学校附属盤の沢特別教授所」とい
うとっても長い名前の分校でした。明治45年5月10日、今から100年以上
前のことです。それは学校というより小屋でした。なにせ親たちが山の木
を切って建てた学校です。児童は15人。このうちの1人がハルさん。本当は
琴似小学校へ通うことになっていましたが、往復16キロもあるの
通うにはきびしく、親たちが学校を建て、琴似小の分校
(特別教授所)としてみとめてもらっていたのです。先生1人に
15人の子どもがワイワイ楽しく勉強していると、タヌキの
親子やウサギやキツネも学校のまわりをこびまわって
ハルさんには山の動物たちも本当に学校に入りたいて

(※)別の資料には児童11人と書かれているものもあります



「言ってるような気がしてならなかったそうですよ。それから学校の前の橋は丸太を2本なわてしぼっただけのものでした。雨や雪の日にはおっかなくてわたれず、大きな子が小さな子をおぶって通ったそうです。」

（もし今もこの様な状況ならきっと同じように

上級生が下級生を助けているだろうなあ……と想像しました）何から何まで足りないものだらけでしたが、一番こまったのが先生が来てもすぐこんな山の中は不便でいやになりやめてしまうことでした。

しかし開校から7人目の先生が来ることになり、ハルさんたちははりきって教室のそうじをして外に一列にならんで待っていました。そこへやってきたのが結城先生だったのです。

先生は家族とともに盤溪小にきました。

「私の名前は結城三郎です、みなさん覚えてください！」

先生の声は山にびんびんとこだましました。

気持ちのいいこと。そして先生は教室にも入らないうちに



「金剛石を歌いまはう」と授業が始まり、父母もみんなて

歌ったそうです。（金剛石の歌は昔学校でよく歌われていたそうですよ。）金剛石とはダイヤモンドのこと、人はみな

たからを持って生まれてきているのだから、そのたからが

光りかがやくように一生懸命勉強して自分で自分のたからを

みがきなさいと。これが先生の教育の根っこだったので、

だから勉強にかけてはとてもしびしかったそうですよ。

でもとてもやさしい先生で、村中の子どもはみんな先生の

こどもみために世話をかけたそうです。髪を切ってもらったり、

歯をぬいてもらったり。奥様もまた人がらがよくしたわれ

さいほうや行儀作法もしこんでもらったそうです。

村中の親たちはよろこび、そしてこの教授所を

結城先生とともに独立校にしたくて努力したのです。

先生は校長の資格を取るために苦勞されたり、役場にも何回も

たのみに行かれたかいあって、独立校「盤溪尋常小学校」と

決まった時のよろこびは村中お祭りのようだったそうです。



そして大正11年12月21日、開校式が明日とせまった日のできごとです。

結城先生は校長の辞令を受け、明日の開校式に読むための「教育勅語を
いただくために琴似役場へ向かわれました。教育勅語とは天皇陛下の
おことばが書かれている書物で、天皇陛下のかわりだと言われるほど
とても大切なものでした。ですから勅語を読むときは必ず真・白の
手ぶくろをはめて読め生徒はみな頭を下げてじっと静かに聞くのです。
結城先生は教育勅語を受け取りに、明日の開校式のことを思い浮かべ
ながら8キロはなれた役場へ出発されたのです。12月21日は朝から
山が「ゴ・ゴ」と鳴る寒い日だったそうですよ。一年で一番日の短い冬至の日。
そのような日にスキーやアや防寒着でなく、紋つきの羽おりはかまで
マントを羽おり、雪のまうち歩いて行かれました。役場で手続きをすませて
午後2時頃役場を出られたそうですが、教育勅語を包むむらさきの
ふくさと白い手ぶくろを買いに円山村のお店に立ち寄りしました。品物が
そろい、お店を出る頃にはもうすっかり夜になっていました。
先生は「大切な勅語を持っているから泊まるわけにはいかない。」と、

お店の方の宿泊の誘いもことわりなうちんをお借りして

雪の中ほろみとうげを登り始めたのです。奥様は、きくと札幌に
泊まってくるのでは？と思っていたそうですが、電話のないむかしです。
もしかしたら…と一晩中赤々とランプをともして先生の帰りを待たれて
いたそうです。夜も10時半頃ほろみとうげの久保田さんの家で
2本目の口ウソクに火をともしられて、「ここまで来れば帰ったものと
同じだ」と言われ、また学校へ向かわれました。吹雪では学校が
近いこともわかりませんし、声も届きません。雪はひざ上の深さになると
歩かれないものです。体全体で雪をおしわけて進むには1メートル
10分以上かかります。学校が見えるあたりまで来たとき、
先生は一步も動けなくなりました…。少し休むおつもりだったのではう…

翌22日開校式の朝、我満さんのおじいちゃんが道をつけようと外に
出てみたら、田んぼの外れで雪の中にうまっている結城先生を
見つけました。羽おりもぬいで教育勅語をしっかりとつみだきかかえ、
すわったままおなくなりになっていました。学校からわずか50メートルの
ところでした。

